

口腔生理学分野一員としての懐古

鹿児島大学名誉教授 原田 秀逸



1960年代には歯科医師を養成する大学が7校、国立は僅か2校しかありませんでしたが、歯科医療充実の要望を受け、1980年代前半にかけて歯学部が16校に新設・増設され、国立大学は11校になりました。鹿児島大学歯学部が1977（昭和52）年に設置された段階では、基礎系が口腔生理学、口腔生化学、歯科理工学、臨床系は歯科口腔外科学、歯科放射線学が医学部に間借りしている状態でした。翌年1978（昭和53）年、既に第一期一年生が入学し、荒田キャンパスで学んでいたのに、歯学部の建物はまだ建設中でした。現在の桜ヶ丘キャンパス前の団地がまだ森だった頃です。そして、本年、2017（平成29）年に創立40周年を迎えることになりました。私が歯学部口腔生理学講座に勤務させて頂くことになったのは1979（昭和54）年ですから、それからほぼ40年近くを歯学部と共に歩んで来たこととなります。

口腔生理学講座は、口腔機能の中で味覚を中心に研究を進めて来ました。初代教授笠原泰夫先生（故人）は大阪大学歯学部から赴任され、鹿児島大学歯学部の設置のためにご尽力され、2003（平成15）年に定年退任されました。その後、私、原田が教授を拝命し、2015（平成27）年に定年退任し、後任に齋藤 充教授が大阪大学歯学部から赴任されて現在に至っています。40年間にたった2回しか教授が交代していないことだけを見ると、活気に乏しい印象を持たれるかもしれませんが、実際に

原貞夫教授（現副学長）との30年にわたる日米共同研究で相互に行き来し、サイエンス誌を含む多数の雑誌に論文を発表しました。その他、アメリカ・シンシナティ州立大学医学部、アメリカ・コロラド州立健康科学センター、大阪大学歯学部、九州大学歯学部、鹿児島大学医歯学総合研究科発生発達生物学講座・生体機能制御学講座・感覚器病学講座、（独）食品総合研究所、（株）アサヒビール、大浦歯科クリニックの皆様と広く共同研究を重ねて成果を発表して参りました。

このような中、2003（平成15）年に大学院医学研究科と大学院歯学研究科を統合再編して、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科が設置されました。設置前の準備段階では、設置承認のために奔走された委員の先生方のご苦勞は大変なものがあったと思います。各教員も詳細な個人資料を作成しなければなりません。大学院設置の結果、それまでの18分野であった歯学部はその3倍の80分野の中に組み込まれることになり、非常に大きな改革であったことは間違いありません。

その後、国立大学の歯科教育機関としての存在意義に留まらず、研究機関としての成果も強く求められることになりましたが、それとは裏腹に研究費は減少する一方の厳しい状況が続いています。今後の歯学部の展望が明るくなるように、功利主義に流されない有意義な議論がなされることが望まれます。次世代を担う学生諸君、先生方のご健闘を心から願う次第です。

1980
1984（昭和59）年からのアメリカ・ルイジアナ州立大学教授 John Caprio 博士、鹿児島大学理学部清



（1980-1983 歯学部8階から）